



## テーマ 医療福祉ゾーンの展開! (豊かな夢を追い続けて)



▲サテライト型特養サンビレッジ大垣から望む堤の朝陽

### 医療福祉の地域展開

厚生労働省老健局振興課長 古都賢一

明けましておめでとうございます。

改正介護保険法は、施行二年目を迎えます。高齢者に尊厳のあるケアを実現できるよう、予防重視型システムの構築、地域密着型サービスや地域包括支援センターの創設など地域包括ケアの実現、情報公表など質の向上策の充実等多様な取り組みを展開しています。

こうした取り組みを実効あるものにするためには、まず、利用者、事業者、行政など関係者の間で、理念の共有が大切です。次に、住み慣れた地域の福祉の水準はどうあるべきか、という目標を地域住民自ら議論し、地域でのサービスの有り様や具体的な連携などについて自己決定することが必要です。合意したら、それぞれの立場で何ができるのか、実現のための想像力を働かせ、実際の行動につなげていくことが重要でしょう。

高齢者の生活上の課題は、これからも増大・多様化していきます。そうした中で、誰もが制度や家族・地域の助けを総合的に活かしながら、自分らしい生活を実現するためには、小さな点で思考するのではなく、地域という面の視点で、地域にサービスを創る、地域にネットワークを創る、担い手を創るという取り組みを協働して実施することが大切ではないでしょうか。

問題解決に方程式はありません、その答は、関係者の知恵と協働が生み出すものです。高齢社会をだれもにとって住みよいものにするために、本年も新生会をはじめ、地域の皆様方がますますご活躍されますことを心からお祈りします。

# 「岐阜シティタワー43 福祉・医療ゾーン」

新年明けましておめでとうございます、ごんぎん、います



社会福祉法人 新生会

理事長 石原美智子

新しい年を迎えて、心新たに  
どんな夢を思い描かれましたで  
しょうか。

「介護の質」を追求して三十  
年を迎えた社会福祉法人「新  
生会」は、昨年は始めて池田町  
から大垣市へ事業を展開致し  
ました。今年は更に大きな発  
展として岐阜駅前の事業が始  
まります。私達は単に事業が  
他地域へ広がるといっただけで  
なく、その内容がどれほど進化  
できるかを考えながら計画を進  
めています。

岐阜では、更に介護の専門  
性を高め、医療や他のサービ  
スの連携、また、その周辺の住  
民との関係を考え、新しい福祉  
文化が芽を出すことを願ってい  
ます。新しい福祉文化とは、人  
間の尊厳が守られるということ  
です。生まれたときから、人生  
の終末に至るまで、実際の生活  
の中で尊厳が守られるとはどう  
いうことかを考察し、実践し、  
確認しながら多くの方々にご批  
判を戴きながら、手探りをして  
みたいと願っています。

「尊厳が守られる」ということ  
は、言うは易く行うは難しです。  
でも、私達は長いオーストラリ  
アからの研修を積み上げてきま  
した。三十年前のオーストラリ  
アが、誰も寝間着のまままで日中  
を過ごしていなかった、誰もベッ  
ドの中に置いておかれなかった、  
誰も最後まで自  
分の責任に置いて  
自分のことを決定  
することが出来た  
という事実を知っ  
ています。

すべての人が年  
を取っていきます。  
年を得ることから  
失うことも出てき  
ます。でも、最後  
まで豊かな人生  
が継続できるとし  
たら、人生の何と  
幸せなことでしょう。

昨年末に出来上がった羽田澄  
子監督の映画「終りよければ  
すべてよし」は、私達に多くの  
ことを問いかけています。

今年も、豊かな夢を追い続  
けて、幸せ多い一年にしていき  
ましよう。

岐阜シティタワー43 完成予想図



## 『夢追い人を求めて』 サンドイミン宮路リーター 小宮山 潤

山口県にある“夢のみずうみ村”をご存知でしょうか？

全国にその影響力を発進しているアイセンターの活動です。

何故それほどまでに多くの指しを得ているのか？それは『自立支援・自己選択・自己決定・自己責任』を追求する為に様々な取り組みを試みているからです。そして、そのアイデアがとても奇抜であり、様々なアクティビティや自己決定の場面の随所に施設内通貨(＝ユーメ)が発生し“稼ぐ”ことができたり、1日のプログラムはあらかじめ自分で予定を立てたり…利用者でなくとも何だかワクワクしてきませんか？それを代表者である藤原茂理事長は“仕掛け”と呼びました。



施設内通貨(＝ユーメ)▶

今、サンピレッジ新生苑・新生メディカル・サンピレッジ国際医療福祉専門学校それぞれが、それぞれのスタッフが見学に行き、それぞれに触発され、それぞれが“自立支援”に向けての取り組みを始めています。そして今、それら同じ方向を向く3つの団体は足並みをそろえ歩み始めました。それが夢会議です。

感性に訴えかけたものに対し、意見交換をし合い、そしてそれぞれの取り組みを報告し合うことで、また新たな発見を得る。これは部署も部門も事業所も越えたとても大きな動きなのです。

「その人が自立に向けて1歩でも前に進む為に…」本人にできることは本人にやらしてもらい、できない部分にだけ介助を行う。こんなに単純な事なのに、私達は何故かつい手を出し過ぎてしまう。以前、新生メディカルの方が話された「地獄への道には、善意が敷き詰められていた」という言葉がまさにそれを表現していると感じました。良かれと思つて行う過剰介護が、結果としてその人のできることを奪つて

いってしまう。この悪循環を解消すべく、徐々に増えていく夢会議のメンバーは夢のみずうみ村に影響を受け、それを手本に歩み続けています。

さあ！日常のケアをちよつと振り返つてみて下さい。ひよつとして、手を出し過ぎてしまつてゐることありませんか？明日からすぐにでもできること。それは、もう一度アセスメントを行い、本当に必要なケアを行うこと、それすなわち自立支援ではないでしょうか？その時、あなたも夢追い人の一員です。



▲夢のみずうみ村 デイセンターの人生現役養成道場

# トピックス

## 「終りよければすべてよし」 全国初上映

過日、羽田監督による「終りよければすべてよし」(第19回東京国際女性映画参加作品)の初上映会が大垣市の情報工房(スインクホール)で開催されました。この映画は終末期医療に関わっている日本・スウェーデン・オーストラリアの取材を通し今後の終末医療について私達に深く問いかけてくる問題作！  
厚生労働省事務次官 辻 哲夫氏の推薦もあり、この日に450名の方が鑑賞しました。



## 「また、歩けた!!」



サンビレッツの「アセスメント ケアサービス」をご存知ですか？在宅で様々な障害を持たれる方に一時入所して頂き専門職員が関わって問題の解決策を見つけ、再び在宅生活ができるように一緒に支援して行くサービスです。写真は自宅療養してたKさん。この様に歩ける様になりました。

「さあ、自宅へ安心してお帰り下さい」在宅サービスがフォローします。

# 燃えよ ケン!!



～サンビ特派員 兼太郎がゆく～



## 認知症ケア賞「功労賞」

日本認知症ケア学会から、認知症ケア賞「功労賞」を頂きました。設立当初より「入所者を選ばない、拘束をしない」という施設のあり方や福祉の方向性を追求し、また認知症の方が在宅生活を続けられるように、地域に見守りや理解を呼びかけて「優しい地域社会の実現」に努力していることが認められました。同じ夢を持つ地域の皆様にご報告します。



## 「来たれ!!」サンビ校へ

10月8日、大垣の十萬石祭が開かれました。秋晴れの空の下、サンビ校が初登場！熱き血潮を胸に秘め、担ぐは神輿と理想の福祉。「他人の痛みを自分のこととして感ずる感性と、人が等しく生きていくことの福祉観を基本として」。大切な想いは重いです。だからみんなと担ぎたい。夢みる同士よ、ぜひ「サンビレッツ国際医療福祉専門学校」へ!!

募集

**本紙表紙写真募集** お年寄りや地域の季節行事等、「夢のある写真」をお待ちしています。

編集後記

今回は「夢」をテーマに取材をしました。大きな夢や小さな夢。夢は人の数だけ、こころの数だけ存在します。今年も皆様の夢が実る一年になりますように。



# グループホームは、すべて の人に適しているの??

## 事例

認知症のAさんは85歳でグループホームへ入所した。遠隔地からの入居で不慣れになることも予想されたが、教員であったAさんは社会性が高く、グループホームの仲間ともすぐに打ち解けて、掃除や洗濯物干し、食器拭き等の役割を積極的に楽しんで暮らすことができた。

しかし、1年を過ぎたころから朝が苦手なAさんは、なかなか起きられなくなった。朝食のテーブルに着かないAさんを仲間が気にして、「Aさんはまだ起きて来ん」。パジャマで

## 解説

トイレへ行く姿を見れば、「Aさん、もうお昼近くやよ。いつまで寝とるの」の発言。それから目覚めても仲間の話し声が聞こえると機嫌が悪く「いやー起きない。眠い。ご飯いらない」と訴えた。

認知症も進み、夜はなかなか寝つかれず、布団に入ってから大声で歌い続けることが毎晩続いた。夜中に歌が始まると隣室のKさんは、Aさんの居室へ「歌を歌うなら外へ行って歌ってー」と怒鳴り込み、ときには、隣室から壁を叩き返すようになった。その意味がわからず不安を言葉で表現できないAさんは「バーカ。この人大嫌い」と言い返した。そして、みずから発したその言葉が本人の気分をよりいっそう悪くし、表情が暗く笑顔も減り、居室の鍵をかけて閉じこもる日が増えてきた。

スタッフは、認知症が進み、言葉の理解が困難になったAさんが、仲間と気分よく関わり合って暮らすためにはどうすべきかを考えた。

Aさんの居室をテーブルの横を通らないトイレ近くの居室へ変更することで朝の問題に対応した。仲間関係を修正するためには、Aさんの得意とするピアノを弾いて、仲間に彼女の存在を認められるよう、彼女の誇りを保持できるように配慮してみた。

その結果、普段はあまり会話がなかったAさんのピアノを聞いたKさんたちは「さすが、先生やっとなだけある」と賞賛の言葉が出て手拍子やピアノに合わせて歌い、Aさん「凛」とした表情で弾く姿がみられた。

しかし、Aさんにとって家庭的な濃い仲間関係が、かえってストレスを抱き、外出拒否や仲間への暴力という行動となり、無意識的に心の負担になっていることが推察できた。そこで、

家族と共にカンファレンスを開いた。若いころ進駐軍に勤め、英語を活かして活躍し、高校の英語教師生活も長かったAさんは、社交性が高く、男性も含め幅広い人数の社会の中で暮らしてきた。また、地域での近所づき合いは好まず、夜は衛星放送を楽しんで朝はゆっくり起きる習慣であった。そして、常に教員であることを意識し、他人の世話や指導を使命に暮らしてきた。狭い空間で家族として暮らすグループホームより、空間が広い個室特養スペースでの環境のほうが暮らしやすいのではないかと提案した。

しかし、家族は環境の変化による混乱を案じていた。スタッフは、Aさんの生活アセスメントから

①お互いが深く関わり合って暮らすグループホームより異性も含み常こ他者と距離を置きながら支え合う暮らしのほうが精神的に安心できること。

②認知症の随伴症状である失語症から思いをうまく伝えられないが、視覚からの理解や判断で新たな環境になじむ力が今ならまだ残っていること。

③リロケーションダメージ（環境の変化に伴う不穏や混乱）が起こらないよう、入所は本人の意志でゆっくり進め家族が案じている施設間の連携とケア理念は今まで同様変わらないこと。

以上の説明に家族は「しかたがない」と、しぶしぶ自由契約特養の個室への移動を了承した。

個室特養への移室にあたり、移動先のホームの会議に参加して、細かく情報を提供した。そして、本人がなじみやすいよう午後のティータイムに付き添い、自己紹介をして仲間入りした。

Aさんは、広い空間をそのときの気分で、ときには他者との距離をもち、ときには近づいて、車イスの方へいたわりの声

や心を向け、ピアノを弾き、暮らしも徐々に落ち着いてきた。

そして、グループホームにはいなかった男性スタッフや男性利用者と会話を楽しみながら気分よく暮らし、心配していた居室を間違えることや夜間に歌うことも起こらなくなった。こうしたのびのびと自由に暮らしているAさんの姿に今では家族も、この「住み替え」の意味を理解でき、以下の説明に心から納得された。

①自らの思いを言葉で表現できないAさんは、行動障害で表現し訴えていた。

②援助にはさまざまな生活領域ごとでのアセスメントやそれを支えるケアの専門性が問われる。

③認知症が高度になってから環境を変えることがダメージになるのではなく、強みを活かせる環境であれば能力のあるうちに住み替えることで自分らしさを発揮することも可能である。

④環境の変更は「何の目的で、誰のために行うのか」という根本的な考えが大切。

一般的にグループホームの環境は認知症高齢者に効果的であるといえるが、すべての認知症高齢者に適しているとは言い難い。進行する認知症症状を適切にアセスメントし、あきらめず本人にマッチした環境を選び、生活をさらに豊かにできれば本人、他の認知症の利用者、介護者それぞれにメリットがあることが理解できたケースである。

Point

青木好美

認知症高齢者の住環境は、  
本人にマッチした環境選びを